

## 中島一夫の「書評」を駁す 鈴木貞美

『新潮』二〇一〇年一月号に、私の『「日本文学」の成立』（以下『成立』）について、中島一夫の「書評」が掲載されていた。二〇〇九年の暮近くなって知り、読んでみたが、まるで「書評」の名にあたいしないものだった。以下、明らかにする。

『成立』は、明治期にはじめてつくられた「日本文学」という概念が日本の「人文学」を意味し、それがヨーロッパの“literature”と根本的にちがっていることを三点にまとめ、その理由と実態、明治期文学についての既評の誤りをただし、今日のわれわれの対処法を示したものである。中島は、この骨格がまるで把握できないまま、「批判」を試みているが、内容のある意見らしきものは、前田愛の「音読から黙読へ」説に対する私の批判にふれたところだけだ。前田は「文字媒体が希少であるために読みきかせなければならなかった享受形態から、コミュニケーション様式が劇的に変化した事態を『音読から黙読へ』と言った」ので、「文字通り『声帯を震わせ』るかどうかが否かを問題にしていたわけではない」、それなのに鈴木は「二義的なこと」を批判しているというもの。中島は、自分が『近読者の成立』からはじめて知ったことを、前田愛の主要な論点と勘ちがいしている。

そもそも江戸時代に「文字媒体が希少」だったわけではない。が、それはここで問題にしなくてもよい。明治中後期がメディアなどの文化事象が大きな変革期であったことは以前から知られおり、前田がそれに何か新事象を付け加えたわけではない。これについては筑摩書房版「前田愛著作集」の当該巻の解説が丁寧に述べている。前田がしたことは、民衆のリテラシーの向上やメディアの発達と「音読」が減少した現象を短絡させ、「音読から黙読へ」と定式化し、それを個室の増加や文体の変化などと結びつけて論じたことなのである。だが、初期教育の発達は「音読」の、メディアの発達は読み聞かせの機会の絶対数を逆に増やすので、音読の相対的な減少は別の理由による。その理由を明らかにするために、そもそも音読と黙読とは区切りがつけられないということから説いたのだ。オルタナティブとして、中島があげている理由のほかに速読者の増加をあげてある。

批評家にも研究者にも議論の組み立てや論点がつかめない人が増え、対象を読んでいない、批判力のない読者にしか通用しない論評が横行している。そして、中島は、中村光夫や江藤淳の客観的リアリズムの成立論、柄谷行人「風景の成立」論などに対する私の批判も、みな「大同少異」と片づける。これらについては、明治期にはじめて客観的リアリズムや主客の分立が起こったのではないこと、それは前近代の日本文化を考えようとせずに西欧モデルに頼ってアナクロニズムに陥り、子規も独歩も読み誤ってきたこと、二〇世紀への転換期には欧米思潮の刺戟を受けて「主客同一」「主客融合」論とその表現が新たに起こったことを具体的に示した。逍遥や抱月の評価も転換すべきだと説いてある。中島は、これらも「二の次」の議論にしたいらしい。

「明治期『言文一致』はヨーロッパの俗語革命に匹敵する」という過剰な意味付与についても、私は議論の混乱の原因を明示し、では何が起こったのかを具体的に明かにした。中島は、これも中身にふれず、その見解を説いた人物として絳秀実をあげ、その名が「一切示されていない」、「その『妄説』の主体は別の人物だというのだろうか」と書いている。自分の読書範囲がこの人のモノサシらしい。ここで、私の対象は、ずっと以前から辞典や事典に記され、今日、常識のように流布している「神話」である。それゆえ『成立』には、「妄説」として『新潮文学辞典』（一九八八）と最近の百科事典『スーパー・ニッポニカ二〇〇二』から引用してある（二八五頁）。この議論をリードしてきた人びとの執筆によるものだ。中島は本文を読まずに、索引だけ見たことになる。

その上、絳の方は鈴木の「大正生命主義」論について名前を出して批判しており、絳の方が「フェア」だという。そして、私の大正生命主義論に対する絳の「批判」を引く。「『生命』を何か普遍的な概念のように思って礼賛することに（多少の留保がつけられたとて）何の意味もあるまい」というもの。これこそ、そして、こんな評言を引くことこそ、フェアではない。私は「『生命』を何か普遍的な概念のように思って礼賛すること」が、二〇世紀哲学、芸術界で国際的にも大きな潮流になっていたこと、それが日本で突出して現れたこと、その様ざまなかたちを明らかにしてきたのだ。その中から天皇を「宇宙大生命の表れ」

と論じる東京帝国大学憲法学教授、筧克彦の見解が生まれ、それが一九三五年前後から大きな役割を演じたことや倉田百三の説いた「散華の思想」などとあわせて、「民族の生命」の大合唱に至る成り行き、その戦時下に跋扈した生命主義が戦後も働きつづけたことなどを明かにしてきた。概念の近代的再編成とともに、この観点の有効性も、年を追って内外に認める人びとが増えている。二〇〇九年には『芸術新潮』六月号にも引用された。

絳の受け売りをする中島の「批判」は、絳を真似て鈴木の「政治に対する回避」に向かう。相手の議論を都合よく加工し、それを読んでいない人びとにあらぬ先入観を与えるように紹介し、その加工した議論を「意味がない」と退けるやり方。この見戯に類する「政治」こそ回避すべきではないか。私は、レーニンなら「左翼小児病」と呼ぶ反権力主義に陥ることなく、時どきの政策を明確にしなければ、それに対するリアクションも分析できないという立場を示し、史料の掘り起こしと同時に新たな分析スキームを提示してきた。明治期を扱った『成立』でも、それと政策との関連(序章二及び第一章一一節)、加藤弘之の家族国家論穂積八束の血統国家論とのかかわり(一三四頁)、その制度が筧克彦のファナティックな主張を生んできたこと(八〇、一二三、一三五頁)などを指摘している。

議論の目的に照らして、必要のない議論をとりあげないことを「隠蔽」とはいわない。当然、取りあげるべきこと、そこに論じてあることをも論じていないかのように描きだし、取るにたらない議論と片づけてみせるのが「隠蔽」である。日本の「人文学」、知のしくみ、自分の頭の働きを根本から規定している概念から反省することなど、「悠長」といつてすませられる中島にとって、『成立』は己れの了見の幅をはるかに超えた無用の長物。それとも脳髓が揺れ出すのを恐れての窮余の一策か。どちらにしても、読んだ人には通用しない「批判」が、そっくり自分に撥ね返ることくらいは心得ておくべきだろう。

付記。この「書評」は、執筆者の読み書き能力の未熟をさらしているだけのものと思いたいが、そうでなければ極度に政治的なシロモノである。『新潮』誌の見識を疑う。本稿をHPに掲載すると同時に『新潮』編集長宛に送る。近刊に掲載されたい。2009/12/28